

「空蟬の尼衣」考

— 玉鬘巻・衣配りから初音巻におよぶ —

小林 理 正

はじめに

落成後、はじめて春を迎えた六条院の風景を描く初音巻。六条院に君臨する光源氏は女君たちのもとを訪れる。紫上を皮切りに、明石の姫君、花散里、玉鬘、そして明石の君のもとで一夜を過し、二条東院に住まう末摘花、空蟬の順にめぐっていく。一見すると、とりたてて述べるほどの問題はないだろう。前巻である玉鬘巻にて、年末、主要な女君たちへの衣配りのさまが描かれてもいたわけだから、回礼を兼ねて女君たちの様子を源氏が確認したとして、さしたる不審はあるまい。むしろ、そこに初音巻の主眼が置かれていたと理解すべきかもしれない。たとえば、紫上を訪れたさい、その本文は次のようにあった。

〈資料一〉

春のおとどの御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに

吹きまがひ、生ける仏の御面とおほゆ。(初音・④・二丁オウ¹)

傍線部のように〈場所〉でもって紫上が示されている。ほかに明石の姫君が「姫君の御方に」(三丁オ)とあり、玉鬘が「西の対へ」(五丁オ)などと記されていることから、この表記法がなにも紫上にもみ見られる特異なものでないことがわかる。だが、空蟬はどういうわけか、次に掲げるように〈場所〉でもって示されない。

〈資料二〉

空蟬の尼衣にもさしのぞきたまへり。うけぱりたるさまにはあらず、かごやかに局住みにしなして、仏ばかりにところ得させたまつりて、行ひ勤めけるさま、あはれに見えて、経、仏の御飾り、はかなくしたる閑伽の具なども、をかしげになまめかしよう、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。

(初音・④・一二丁オウ)

空蟬を訪れ、その様子を記した点は紫上の場合と同様なのだが、

「空蟬の尼衣」という一文は、ほかの女君とは明らかにそのレベルが異なる。当該箇所を通行する語注釈書、現代語訳で確認すると、おおむね次のように理解されていることがわかった。

〈資料三〉

- 空蟬の尼君の所へも、顔をお出しになった。〔『評釈』〕
- 序に尼姿の空蟬の所にも顔を出された。〔『新釋』〕
- 尼姿の空蟬のもとにも、顔をお出しになった。〔『全集』〕
- 尼姿の空蟬のもとへも、顔をお出しになった。〔『集成』〕
- 君は、尼姿の空蟬のもとにも顔をお出しになった。〔『完訳』〕
- 君は、尼姿の空蟬のもとにも顔をお出しになった。〔『新編全集』〕

○ 尼姿の空蟬のもとへもお顔をお出しになりました。〔『正訳』〕

「尼衣」は「尼君／尼姿」と解釈されており、本文そのものを十分に読み解いたとはいえない。たしかに現代語訳を記すさい、尼衣は尼装束を指すのだから「尼姿」とする措置は理解できるし、それを誤りと批判するつもりもない。だが、空蟬が〈場所〉や「御方」などではなく「尼衣」と記されていた事実を、ほかの女君たちと十把一絡げに読み解く―ましてや、その本質を無下にする―ことは許されないだろう。このような問題意識のもと、本稿では「空蟬の尼衣」とあった表現上の狙いを探ろうと思う。

一 「尼衣」と「尼君」

『源氏物語』において「尼君」という語が存在するならば、空蟬を「尼衣」とわざわざ記す必要性はどこにもない。たとえば、〈資料二〉掲出場面のうち、次のような記述がある。

〈資料四〉

尼君もものあはれなるけはひにて、「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知らればべりける」と聞ゆ。〔初音・④・二二丁ウ〕

〈資料四〉を見れば明らかだが、空蟬は傍線部のように「尼君」と示されることがある女性であった。試みに『源氏物語大成』校異篇³を利用し、「空蟬の尼衣」の異同を確認すると、池田本・阿里莫本・麦生本の三本に異同が確認された。その詳細については、池田本は「うつせみのあまころ（君に）もにも」とあって、「ころ」をミセケチにし、「君に」と改めていることがわかった。つまり、「尼君にもにも」という本文をもつことになるわけだが、このままでは意味をなさない。余分の「にも」を削るべきだろう。また、阿里莫本は「うつせみの君にも」とあり、「尼衣」を「君」に改めているし、麦生本は「うつせみのあま衣君にも」とあった。麦生本の本文については、池田本のような傍書を有する本文を書写しなさい、その傍書が本文化した可能性が考えられる。いずれにしても、当該箇所に

「君」とある伝本は掲出した三例を除いて管見に入らない。¹⁾つまり、「尼衣」はいわゆる青表紙本や河内本などといった特定の伝本群によって偶発的に生まれた損傷本文ではないといえる。

とはいえ、考えてもみると「尼衣にもさしのぞ」くことなどあるだろうか。いい換えれば、「尼衣」は「さしのぞ」く対象となり得るのか、ということである。いま問題としている初音巻の例を除いた「さしのぞ」くの『源氏物語』における全用例（＝二五例）⁵⁾のうちから、いくつか確認することで、当該語句の語感を捕捉しようと思う。なお、掲出しなかった「さしのぞ」くのほかの用例を検討しても、後述する結果に変わりはない。

〈資料五〉

○ いかなる者の集へるならむとやう変りて思さる。（中略）、しさしのぞきたまへれば、門は蒔のやうなる、押しあげたる、見いれの程なくものはかなきすまひを、あはれに、「いづこかさして」と、おもほしなせば玉の台も同じことなり。

（夕顔・①・一丁ウ〜二丁オ）

○ 又の日、うへにさぶらへば、台盤所にさしのぞきたまひて、「くはや。昨日の返り事、あやししく心ばみ過ぐるる」とてなげたまへり。

（末摘花・②・三三丁オ）

○ わが齢もいととおぼえて恥づかしけれど、「なほさしのぞけ。

我を見知りたりや」とて、顔さし出でたり。

（玉鬘・④・二二丁ウ）

○ （女君達ヲ）みなさしのぞきわたしたまひて、「おぼつかなき日数つもる折々あれど、心のうちは怠たらずなむ。ただかぎりある道の別れのみこそうしろめたけれ。命を知らぬ」など、なつかしくのたまふ。

（初音・④・二三丁ウ）

本来、このように「さしのぞ」く対象は（人／場所）である場合が多い。もちろん、たとえば「台盤所に」とあった末摘花巻の例は、「台盤所に」いる命婦のもとに顔を出したのであって、対象は人であるといつて差し支えない例でもある。では、「空蟬の尼衣」はいかかか。〈資料五〉によって、「さしのぞ」くの語感を確認するかがり、「空蟬の尼衣にもさしのぞきたまへり」は、本来、「空蟬の尼君にもさしのぞきたまへり」などとあるべきで、本稿冒頭で確認した通行する諸注釈書、現代語訳の理解は、このあたりのニュアンスを読み取った結果のものであったと推察できる。

なお、「尼衣」という本文は、藤原定家をはじめ、数多くの歌人や連歌師、さらには一条兼良のような古典学者を含めた〈読み手〉の校訂・校勘をパスし、現在まで伝わったものである。「尼君」ではなく「尼衣」と記されていたからには、当該語句の使用に何らかの意図があったとみてよいのではないか。

二 空蟬への衣配り再解釈

空蟬がその身に纏う「尼衣」は衣配りによって贈られたものであった。衣配りの場面は、「尼衣」がどのようなものであったか確認するために読み解く必要があるだろう。

〈資料六〉

空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にあるくちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに似ついたり見むの御心なりけり。(玉鬘・④・四八丁ウ〜四九丁オ)

掲げた本文が問題とする衣配りの場面である。この場面には大きな異同もないため、十分な検討が施されてこなかった感がある。しかし、傍線部の解釈には諸注釈書、現代語訳間に「ゆれ」が存在し、いまだ明確な解答が得られているとは必ずしもいえない。通行する諸注釈書、現代語訳の理解は次のとおりである。

〈資料七〉

○ 源氏のお召料の中にあるくちなし色の御衣に禁色の薄紅の衣を添へて。(『全書』)

○ 御自分のお召し料のくちなし色のお衣に、聴し色のお加えになつて。(『評釈』)

○ 源氏自身の御召し料の中にある、梔子色—黄色の御衣(下襲)

と誰が着ても差支えない聴色—薄紅色の御衣(下襲)をも添えて配りなされた。(『大系』)

○ お召し料の中の梔子色の御衣に聴色のお加えになつて、(『全書』)

○ ご自分のお召料の中の梔子色の御衣の聴色のお加えになつて。(『完訳』)

○ ご自分のお召料の中の梔子色の御衣の聴色のお加えになつて、(『新編全集』)

○ ご自身のお召料の中の梔子色の御衣の聴色のお添えになつて、(『正訳』)

解釈は二とおりあり、一つ目は「青鈍の織物」に加え、「くちなしの御衣」と「ゆるし色の衣」の合計三種もの衣が贈られたと理解する向き(『全書』・『評釈』・『大系』・『全集』・『新大系』・『注釈』)、二つ目は「青鈍の織物」と「ゆるし色である」、「くちなしの御衣」を贈った、つまり二種の衣が贈られたと理解する向き(『完訳』・『新編全集』・『正訳』)である。これらの違いは、「ゆるし色なる添へたまひて」をめぐって、「なる」の下に襲などの語が省略されていると読むか、「くちなしの御衣(の)ゆるし色なる添へたまひて」などのように同格と理解するかに因るといえる。

二とおりの解釈のうちどちらをとるべきか、空蟬の記述を正しく読み解かねばならない。試みに衣が配られたほかの女君たちの記述

と比較し、問題の本文はどのように理解すべきか探ろうと思う。なお、引用本文にみられる源氏が贈った装束は、私に二重傍線を付し表示しておいた。

〈資料八〉

- (紫上二八) 紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとはかの御料、(玉鬘・④・四七丁ウ)
- (明石ノ姫君二八) 桜の細長に、艶やかなる搔練とり添へては姫君の御料なり。(玉鬘・④・四七丁ウ)
- (花散里二八) 浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、にはひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏の御方に、(玉鬘・④・四七丁ウ)
- (玉鬘二八) 曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対にたてまつれたまふを、(玉鬘・④・四八丁オ)
- (末摘花二八) かの末摘花の御料に、柳の織物のよしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば(玉鬘・④・四八丁オ)
- (明石ノ君二八) 梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、(玉鬘・④・四八丁ウ)
- 空蟬の例を脇に置き、示した例を眺めれば、二種の装束が贈られたことが明らかな場合、一つ目の衣に二つ目を加えるのに「装束十に」の形を取るものが多い。空蟬の場合はどうであったか。一見し

て明らかなように「装束十に」の型にあてはまらない。とはいえず、明石の姫君の記述「艶やかなる搔練とり添へて」と空蟬の「ゆるし色なる添へたまひて」は酷似しており、これを承けたのか、あるいは単純に語順どおり読み解いたのか、大半の注釈書は当該箇所を空蟬に三種の衣が贈られたと理解する。だが、空蟬を除くほかの女君たちに贈られた装束数を考え合わせるとき、空蟬に三種の衣が贈られたとは思えない。源氏は、紫上に「葡萄染の御小桂」と「今様色のいとすぐれたる」装束を、明石の姫君に「桜の細長」と「艶やかなる搔練」を、花散里に「浅縹の海賦の織物」と「いと濃き搔練」を、玉鬘に「曇りなく赤き」装束と「山吹の花の細長」を、末摘花に「柳の織物」を、明石の君に「唐めいたる白き小桂」と「濃きが艶やかなる」装束を贈っていた。つまり、源氏の関心を集める主要な女君たちには、多くて二種の衣を贈っていたのである。空蟬にのみ三種の装束を贈ることなどあり得るだろうか。

ところで、紫上と末摘花の例は、空蟬同様、「装束十に」の型で記されていない。空蟬の一文を正確に把握するうえで、これら二例を読み解いておく必要があるだろう。まず紫上の例についてだが、「紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとは」とあった。「葡萄染の御小桂」と「今様色のいとすぐれたる」が並列関係にあり、衣が二種贈られたと理解されてきた。たとえば、並列するA・Bを掲げて「とは」で受ける型の本文には次のような

ものがある。

〈資料九〉

○ 五節の参る儀式は、いづれともなく、心々になくしたまへるを、舞姫の容貌、大殿と大納言殿とはすぐれたり、とめでのしる。
(乙女・④・四二丁オ)

○ 少将と藤侍従とは、いとからしと思ひたり。

(常夏・⑤・三丁ウ)

○ 「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前まへなる紅梅と桜とは、花の折々に心留めてもてあそびたまへ

さるべからむ折は、仏にもたてまつりたまへ」と聞こえたまへば、
(御法・⑦・一〇丁オ)

いづれの例も、「AとBと十は」型であり、前項に下接する「と」は省略されてはいない。大島本全体においても、「AとBと十は」型の最初の「と」を省略する例は管見に入らなかった。その点で、紫上の場合には例外となるが、文脈上、並列関係を示す語法と認定せざるを得ない。そのうえで、「御料にあるくちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」とあった空蟬の例と比べると、「とは」を有しない空蟬の例とは同型ではない。

次に末摘花の例であるが、「柳の織物」のよしある唐草を乱れ織れるも「傍線は小林」とあった。ここにみられる傍線部「の」は同格の「の」であるから、「柳の織物」が「よしある唐草を乱れ織」

られたものであると知れる。試みに、次に同格の「の」が省略された例をいくつか示すが、そのなかに装束をめぐる本文が存在することは注目してよいだろう。なお、引用本文に同格の「の」があると考えられる箇所「(φ)」を付しておいた。

〈資料一〇〉

○ 女君の御乳母(φ)も侍従とはやりかなる若人、いと心もとなうかたはらいたしと思ひて、
(末摘花・②・一六丁ウ)

○ 表着には黒貂の皮衣(φ)いときよらにかうばしきを着たまへる。
(末摘花・②・二六丁オ)

○ 当帝の御子は右大臣のむすめ(φ)承香殿の女御の御腹に男御子生まれたまへる、二になりたまへば、いといはけなし。
(明石・③・三八丁オ)

○ いときよらなる朽葉の羅(φ)今様色になくうちたるなど、ひき散らしたまへり。
(野分・⑤・一八丁ウ〜一九丁オ)

〈資料一〇〉を踏まえたうえで、空蟬の例に視線を戻したい。空蟬の場合、「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」とあった。空蟬の例の解釈についての私案は、『完訳』・『新編全集』・『正訳』と同様、「くちなしの御衣(φ)ゆるし色なる添へたまひて」と想定し、同格の「の」が省略されたものと読み解く―つまり、末摘花の例と同型と理解するものである。

私案の成り立つ可能性を探るうえで、「くちなしの御衣、ゆるし

色なる添へたまひて」に含まれる「ゆるし色」についても検討する必要があるだろう。たとえば、〈資料七〉を見れば、通行する注釈書のうち、『全書』・『評釈』・『大系』・『全集』などが「ゆるし色」を「ゆるし色の衣」と読み解いていたことは明らかである。だが、「ゆるし色」はあくまでも「色目」を指す語であり、次に示すように単独で装束を表現することがない。

〈資料一〉

○ ゆるし色のいみじくかうばしきを、君に被け奉らんとて、女君にうち被けたまへば、「何の祿ならん」とて笑ひたまふ。

(九条家本「おちくほ物語」・巻二・三三丁才)⁸⁾

○ ゆるし色のわりなう上白みたる一襲、なごりなう黒き桂重ねて、表着には黒貂の皮衣、いとぎよらにかうばしきを着たまへる。
(末摘花・②・二六丁才)

○ 山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びもてなしたまへるしも、いみじう見るに笑まれてきよらなり。
(須磨・③・四八丁才)

○ 御衣の色の変らぬを、かの御方の心寄せわきたりし人々の、いと黒く着かへたるを、ほの見たまふも、

紅に落つる涙もかひなきは形見の色を染めぬなりけり

ゆるし色の水解けぬかと思ゆるを、いとど濡らしそへつつなごめたまふさま、いとなまめかしくきよげなり。

(総角・⑨・一〇一丁ウ)

『落窪物語』の一例と、空蟬の記述を除いた『源氏物語』における「ゆるし色」の全用例を掲出したが、必ず色目として「ゆるし色」は使用されていた。「ゆるし色」のみで装束を意味することはない。となれば、やはり空蟬の本文は「青鈍の織物」と「ゆるし色なる」「くちなしの御衣」の二種の装束が贈られたと理解するほかないだろう。つまり、「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」についての解釈は、「くちなしの御衣⇨ゆるし色なる」なのである。この理解に従えば、〈資料七〉に掲出した諸注釈書(『全書』・『評釈』・『大系』・『全集』)が示した理解、つまり、空蟬にのみ三種の装束が贈られたとする解釈は成り立ちえないことが知れる。⁹⁾

以上の考察により、源氏が空蟬に「青鈍の織物」と「くちなし御衣、ゆるし色なる」を贈ったのは確かかといつてよいが、そもそも源氏は、なぜ空蟬にそのような衣を与えたのだろうか。衣配りという営みについて、たとえば吉野誠¹⁰⁾は次のように述べている。

〈資料一〉

光源氏の、衣を〈与える〉行為は、女君のそれぞれの美質にふさわしい衣服の贈与であるとともに、それを〈着こなす〉女君たちのセンス、教養、機知を問い、その質によって、愛情の分配の在り方すら定まってしまうような権力的な営為でもあるのだった。

さらに、吉野は、初音巻にて女君たちをめぐる源氏の行為を「女性のそれぞれにそぐう衣服を選び得た自分の審美眼を自己確認するためのものではない」とも述べる。単に物語世界に色彩を添えるためだけに、源氏に衣を贈らせたのではないと理解してよいだろう。「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」を贈った理由はまだ充分には読み解けていない。

三 「くちなしの御衣、

ゆるし色なる添へたまひて」の基層

「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」にある「くちなし」が「口無し」に通じる歌語であることは広く知られている。歌語「くちなし」の根幹にあるイメージは次に示す歌に代表されるといえる。

〈資料一三〉

くちなし

○ おもふともこふともいはじくちなしのいろにころもをそめて

こそきめ

〔古今和歌六帖〕第五・三五〇八番¹¹⁾

(題しらず)

素性法師

○ 山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

〔古今和歌集〕卷一九・誹諧歌・二〇一二番

「くちなし」は胸に秘めた思いを顕さない表現と結ばれる歌語である。『古今集』歌を見れば明らかだが、「くちなし」は「山吹」と

ともに詠まれることがある。梔子色と山吹色がともに黄系統の色であり、和歌では近しいイメージで捉えられるようになったのだろう。この「くちなし／山吹」の歌語イメージは『源氏物語』の〈読み手〉も理解していたとみてよいだろう。また、たとえば、次に示すような源氏の詠歌をみるかぎり、『源氏物語』の物語世界においても「くちなし＝山吹」のイメージが共有されていたことがわかる。

〈資料一四〉

「色に衣を」などのたまひて、

思はずに井出の中道隔つとも言はでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」などのたまふも聞く人なし。

(真木柱・⑤・四〇丁ウ〜四一丁オ)

「色に衣を」とは先に示した「おもふとも」歌を引歌とする表現である。「色に衣を」などと述べたうえで、「言はでぞ恋ふる山吹の花」と詠む源氏は、明らかに山吹がもつ歌語としてのイメージを理解している。

さらに、「山吹」には次のような詠出例があることも見逃せない。

〈資料一五〉

春ころ、久しく音せぬ人の、山吹に日頃の罪は評せと言ひ

たるに

とへとしも思はぬ八重の山吹を許すと**言はば折りにこんとや**

(榊原本『和泉式部集』上・一四丁オ・一五八番歌¹²⁾)

「山吹は八重に咲くのであって、十重、咲きとは思わないように、私はあなたに訪れて下さい（『訪へ』）とも思わないのに、くちなし色の山吹よろしく音信不通であった過往（『罪』）を許すと私がいうならば、八重山吹を手折りに（『私に逢いに』）来るというのでしょうか」と詠まれている。歌意からも明かなように、当該歌における「山吹」は「くちなし（口無し）」のイメージが含まれている。問題は詞書にみられる「山吹に日頃の罪は許せと言ひたる」行為―「山吹に言寄せた」点にある。源氏は装束を「同じ日着たまふべき御消息」とともに贈っており、その有り様は「げに似ついたり見むの御心なりけり」といった具合であった。源氏の「御消息」は装束とともに贈られたわけであり、空蟬に配られた装束の一領は「くちなしの御衣」であった。つまり、源氏が「聞こえめぐらし」た「御消息」は、空蟬についてのみいえば、「くちなしの御衣」に言寄せたものであったのである。

試みに「とへとしも」歌をとおして「御料にあるくちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ」とあった空蟬への衣配り周辺の本文を読み解いてみよう。「年の暮に御しつらひのこと、人々の御装束など、やむごとなき御つらに思しておきてたる」（玉鬘・④・四六丁才）源氏は、空蟬に「青鈍の織物」と「くちなしの御衣、ゆるし色なる」装束を贈った。装束は「同じ日着たまふべき御消息」とともに贈られたから、源氏

が「くちなしの御衣」に言寄せた格好である。「とへとしも」歌が「春、ろ」に「山吹に日頃の罪は許せと言ひたる」との詞書を有し、山吹に言寄せた格好であったのと通い合うといえば、いい過ぎであろうか。

四 装束に込められた〈コード〉

「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」をめぐる本文は、ここまでの検討と次に掲出する場面に描かれる源氏の姿を考え合わせるべき、「とへとしも」歌を踏まえたものであるように思える。

〈資料一六〉

青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたく居隠れて、袖口ばかりぞ色ことなるしもなつかしければ、涙ぐみたまひて、「松が浦島を遙かに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」などのたまふ。尼君もものはれなるけはひにて、「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」と聞ゆ。（初音・④・二二丁ウ）

まず考えたいのは二重傍線部の意味である。場面は「青鈍の几帳」に隠れる空蟬の姿―「袖口ばかりぞ色ことなる」、つまり「くちなしの御衣」を身に纏っている姿―を目にした源氏が涙ぐんだ、というものののだが、なぜ「くちなしの御衣」を纏った空蟬の姿を確認

した源氏が涙ぐむ必要があったのか。この疑問を解消する鍵こそ本稿で取りあげている「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて」の一文なのではないか。

そもそも女君たちが衣配りにおいて贈られた装束に身を包む行為とは、どういった意味があったのか。三田村雅子¹³⁾は次のような見解を示している。

〈資料一七〉

正月用の衣装は、女たちの個性がまずあって、それにふさわしい衣料が選ばれたというよりも、光源氏によって序列化され、差異化された役割・品格の象徴ともいえるべき「衣装」を身にまとい、その暗黙の要求に応えて、衣装にふさわしい気品と風格を演じることが六条院の女たちに求められていたのである。

では、「くちなしの御衣」を身に纏う行為にはどのような意味があったのだろうか。〈資料一三〉にて示した「おもふとも」歌のように、やはり「くちなし」には「口無し」のイメージがつきまとう。「くちなし」のもつ「口無し」（＝無言）の語感に従い、素直に初音巻の問題の場面を読み解けば、源氏が「さすがにかばかりの御睦びは絶ゆまじかりけるよ」などといったのに対して、本来、空蟬は「かかる方に頼み聞こえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知られはべりける」などと応対すべきではない。にもかかわらず、物語世界では空蟬は応対したのである。つまり、歌語「くちなし」のイ

メージとは異なる意味が、衣配りで贈られた「くちなしの御衣、ゆるし色なる」には付与されていたとみる必要がある。

空蟬に贈られた「くちなしの御衣」をめぐる一文を、我々はどうように読み解けばよいのだろうか。試案として、和泉式部の詠歌「へとしも」歌の詞書のごとく「山吹に日頃の罪は許せ」といった意味が贈られた装束に込められていた、という解釈を提案したい。いってしまえば、「くちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ」という一文に、空蟬を二条東院へ引き取ってのち、無沙汰であったことを許すよう求める〈コード〉が含まれていた、と理解すべきではないかということである。なお、〈コード〉を孕んだ装束を身に纏った空蟬については、源氏の要求に応えていたと読み解くことができるだろう。

和泉式部の詠歌が引歌として『源氏物語』に使用されていることは、つとに鬼束隆昭や寺本直彦によって詳細に論じられている¹⁴⁾。だが、「へとしも」歌について、言及した論考はいまだ管見に入らない。試案についてはもう少し検討しておかねばなるまい。

五 空白の〈読み〉

〈資料一六〉における傍線部「さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」の意味を読み解くことで、試案の成立する可能性を探ってみたい。そうはいつても、こうしたお付き合い（＝物

越しでの対面)は、絶えそうもなかったのだね」といった具合に理解できる当該箇所なのだが、なぜ、源氏は「さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」と述べる必要があったのか。この疑問について考えるとき、玉鬘巻の衣配りに至るまで、関屋巻で出家した空蟬と源氏の交渉、その一切が描かれなかった事実は見逃せない。後藤祥子、山田利博らは、二条東院への引き取りの事実の経緯が十分に記されてはおらず、納得がいかない旨を指摘するわけだが、異文としても本文が存在しないため、踏み込んだ検討は現在までなされてこなかった。この描かれなかった空白期間の実態は謎とされ、読み解こうとする向きさえなかったように思う。¹⁶⁾

その全容が詳らかでない空白だが、『源氏物語』・雲隠巻と同様、記されていないことに注目して読み解くことで、幾分なりともその実態を推定することはできる。たとえば、W. イーザー¹⁷⁾は空白(Ⅱ欠落部分)について次のように指摘する。

〈資料一八〉

個々の文の相関体が次に来るものを志向しているといっても、それには限度があり、そこで呼び起こされる期待は、どれほど具体的であっても、どこかが欠落している。この欠落部分こそ、その補足が予測されるために、期待を生み出す働きをする。

〈読み手〉が、イーザーが述べたように空白に対して「その補足

が予測」できたか定かではないが、「さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」という発言をみるかぎり、空白の期間、源氏は空蟬に無沙汰であった可能性を読み取ることができるといっても、仮に源氏が、玉鬘巻の衣配りで空蟬に装束を「同じ日着たまふべき御消息」とともに贈らず、また初音巻で空蟬のもとを訪れなければ、二人の関係は絶えていたかもしれない。逆をいえば、源氏が訪れたからこそ「かばかりの御睦びは、絶ゆまじかりける」のではなかったか。つまり、描かれなかった空白期間の源氏は空蟬に無沙汰であり、源氏自身空蟬との関係が絶えていることを認識していた。それゆえ、贈った装束に身を包んだ空蟬の姿(Ⅱ要求に応えた姿)を確認した源氏は涙ぐみもし、「かばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」と述べたのではないか。

謎とされてきた空白であったが、〈作者〉は本文を記さないこと(Ⅱ空白)によって、源氏が空蟬に無沙汰であった実態を表現していたのではあるまいか。いい換えれば、空白であることによって、〈読み手〉に源氏の無沙汰を察知させようとする目論見があったのではないか。空白によって無沙汰であることを示す他例は見当たらないが、初音巻における源氏と空蟬を描いた本文についての疑問は、空白を本稿で示した推定のごとく読み解き、「とへとしも」歌を想定することで解消可能であった。〈読み手〉がおの自由の自由に物語を読み解いたなかに、試案として示した解釈が含まれていたと考える

ことは、充分可能だと思ふ。

おわりに

「御料にあるくちなしの御衣、ゆるし色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ」に〈コード〉が孕まれている可能性と、謎とされてきた空白期間、源氏が空蟬に無沙汰であった可能性を本稿では示した。源氏の求めた〈コード〉は、贈られた装束を空蟬が纏ったことから、受け容れられたものと推察される。

ところで、たとえば検討箇所が「空蟬の尼君」とあった場合、本稿で示した解釈に従ったところで、〈読み手〉は空蟬が源氏の贈った装束を着用したか、当該箇所から判断できない。つまり、「空蟬の」尼君⁽¹⁾では、空蟬が源氏の要求に応えたかどうかわからないのである。一方、「尼衣」とあった場合、「尼君」とあったさいの問題は解消される。

思うに「空蟬の」尼衣⁽²⁾とあった表現上の狙いは、「尼衣」と記すことで、装束を身につけた（＝要求に応えた）空蟬を描き出すこと、さらに、無沙汰であった過往とは異なる新たな関係が、空蟬と源氏の間構築されたことを〈読み手〉に示唆することにあつたのではあるまいか。

「とへとしも」歌が『後拾遺集』に入集したことも手伝い、後代

では本稿で示した解釈同様の理解で当該箇所を読み解く〈読み手〉は少なからず存在したと思う。それは藤原定家、源光行・親行父子の手がけたそれぞれの『源氏物語』本文の流れを汲む伝本が「尼衣」を「尼君」へ改めることなく残すことから想定できるだろう。

なお、本稿は「とへとしも」歌を引歌であると指摘することを目的としてはいない。というのも、〈コード〉を読み解くのはあくまで〈読み手／享受者〉に許される行為であつて、〈作者〉ではないためである。引歌とは異なるレベルではあるが、当該場面を理解するために求められた要素が「とへとしも」歌である蓋然性は高いといえるだろう。このように引歌に至らないまでも、表現の根底に存在する「発想」の原点を捉える検討は、作品理解に対して無意味ではあるまい。

〔注〕

(1) 古代学協会・古代学研究所編『大島本 源氏物語』第一～九巻（角川書店、平成八年）。『源氏物語』の引用本文は、特記しないかぎり同書に拠った。なお引用のさい、本文の仮名表記を漢字に改めたり、句読点を付したり、括弧を付すなどの措置を私に取った。ミセケチについては「」と示した。なお巻名・巻数・丁数を括弧に入れ、本文の所在を示した。

(2) 以下、本稿で扱う諸注釈書、現代語訳の書誌情報と略称を掲げる。池田亀鑑校注『日本古典全書 源氏物語』第三巻（朝日新聞社、昭和三十一年・

第四版) — 『全書』。山岸徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語』第二卷(岩波書店、昭和三四年) — 『大系』。玉上琢彌『源氏物語評釈』第五卷(角川書店、昭和四〇年) — 『評釈』。吉澤義則『對校源氏物語新釋』第三卷(国書刊行会、昭和四六年) — 『新釋』。阿部秋生、秋山虔ほか校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語』第三卷(小学館、昭和四七年) — 『全集』。石田穰、清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語』第四卷(新潮社、昭和五四年) — 『集成』。柳井滋、室伏信助ほか校注『新日本古典文学大系 源氏物語』第二卷(岩波書店、平成六年) — 『新大系』。阿部秋生、秋山虔ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語』第三卷(小学館、平成八年) — 『新編全集』。山崎良幸、和田明美ほか編『源氏物語注釈』第五卷(風間書房、平成一六年) — 『注釈』。阿部秋生、秋山虔ほか校注・訳『完訳 日本古典 源氏物語』第四卷(小学館、昭和六〇年) — 『完訳』。中野幸一訳『正訳 源氏物語 本文対照』第四冊(勉誠出版、平成二八年) — 『正訳』。

(3) 池田亀鑑編『源氏物語大成 校異篇』卷二(中央公論社、昭和五七年・第一〇版)。

(4) 注③同書の収録諸伝本は、示した三本を除いて、いずれも「尼衣」とあった。なお注③同書未収録伝本を対校に用いた『新編全集』や『新大系』の「校訂付記」、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第六卷(おうふう、平成五年)なども参照したが、本稿で示した伝本を除いて「尼君」とあるものは確認できない。

(5) 上田英代、村上征勝ほか編『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』第三卷(勉誠出版、平成六年)を利用した。

(6) 衣配りの検討に多くの紙幅を費やした論考には、柳瀬あや子『源氏物語』衣配りにみる衣装観—人柄の象徴としての衣装の色目—(神戸ファッション造形大学・神戸文化短期大学研究紀要)第三二号、平成一九年三月)

や、吉野誠『源氏物語』第一部の服飾表現—赤色袍・直衣・衣配り、または着る光源氏・着せられる玉鬘—(河添房江編『平安文学と隣接諸学九卷 王朝文学と服飾・容飾』、竹林舎、平成二二年五月)、有田祐子『源氏物語』の衣装論—「玉鬘」・「初音」巻を通して—(成蹊國文)第四五号、平成二四年三月)などがあるが、贈られた衣と人物の関係を検討するばかりで、表現そのものについて考察したものではない。

(7) たとえば『新大系』はこの箇所「語釈しか見当たらないが、初音巻の脚注に「桂の袖口の色も、源氏から贈られた梶子色、聴し色であるう」(傍線は小林)とあり、この場面を三種の衣が贈られたと理解しているとき、それぞれに注を施す。また『注釈』は「注釈」の項にて「くちなし」と「ゆるし色」、それぞれに注を施す。「ゆるし色」については「聴色」は禁色に対して、誰もが着用を許された色。薄紫と薄紅」とあって、修飾関係について言及しないあたりを見れば、三種の衣が贈られたと理解しているとみてよいか。

(8) 吉田幸一『古典聚英四 おちくは(九条家本と別本草子)上』(古典文庫、昭和六一年)。なお引用本文については注(1)と同様の措置を取った。

(9) たとえば松村さやかはその論考『源氏物語』における尼の服色について(河添房江編『平安文学と隣接諸学九卷 王朝文学と服飾・容飾』)のなかで、また後述する三田村雅子(注⑬)も稿者と同様、二種の衣が贈られたと理解し、三種贈られたとしない。

(10) 注(7)吉野誠の論考。

(11) 和歌の引用は、特記しないかぎり『新編国歌大観』(角川書店)に拠った。
(12) 小町谷照彦『日本古典文学影印叢刊九 榊原本私家集一』(貴重本刊行会、昭和五三年)。なお引用本文については注(1)と同様の措置を取った。

(13) 三田村雅子『浮舟物語の〈衣〉—贈与と放棄—』(同『源氏物語 感覚の論理』、有精堂出版、平成八年三月)収録。

- (14) 鬼束隆昭『源氏物語と和泉式部との交渉』（早稲田大学平安朝文学研究会編『岡一男博士頌寿記念論集 平安朝文学研究 作家と作品』、有精堂出版、昭和四六年三月）収録。寺本直彦『源氏物語受容史論考 続編』（風間書房、昭和五九年一月）収録の一連の論考。
- (15) 後藤祥子「空蝉」（国文学 解釈と教材の研究）第一三巻六号、學燈社、昭和四三年五月）、山田利博「忌避する」女性の連鎖」（同『源氏物語解析』、明治書院、平成二二年一月）収録。
- (16) 近現代以降の『源氏物語』の研究史を確認したが、空蝉をめぐる空白を積極的に読み解こうとする論考ははまだ管見に入らない。
- (17) W. イーザー／饒田取訳『岩波現代選書 行為としての読書 美的作用の理論「特装版」』（岩波書店、平成一〇年）。

—こぼやし・ただまさ、広島大学大学院文学研究科博士課程前期在学—